

房総半島における非在地系土器について

縄紋時代中期後葉の曽利式系土器のあり方

Non-Local Pottery in the Boso Peninsula:
The Sori Type of Pottery in the Latter Half of the Middle Jomon Period

OUCHI Chitoshi

大内千年

はじめに

房総半島は周囲を海に囲まれ、古くから遠来の様々な文物が交差する地域であったことが知られている。どの時代においても、考古学的には遠隔地に由来する情報が到来したことが遺物から窺えるが、半島というその地理的な特性から、そうした情報が吹きだまったように見受けられるケースがあり、地域間交流を考える際には格好のフィールドとなる。

縄紋時代の房総における遠隔地からもたらされた遺物の代表例は、石器の主要な石材である黒曜石であろうが、その他に遠隔地との交流を示す代表的な遺物として「異系統土器」と呼ばれる土器が挙げられる。関東地方においては縄紋土器編年の大枠はほぼ確定したと考えるが、そうした状況の中、これまで縄紋土器研究の主流であった土器編年研究とは違う視点からの土器研究を模索する試みの中で、「異系統土器」に対する関心は近年高まっているといえよう。ただし、地域間交流という視点からすると「異系統土器」は比較的広範な概念を含む用語と考えられ、ここでは「ある地域において主体となる土器以外の、他地域の影響が窺える土器」という意味で「非在地系土器」の用語を用いて論を進めたい。

今回、房総半島における縄紋時代中期後半における「非在地系土器」の代表として、「曽利式系土器」を取り上げる。房総半島における曽利式系土器は、比較的古くからその出土例が知られており、特に口辺部に斜線文・重弧文を持つ土器については、比較的多数の出土例があることが注意されてきた。

筆者は、2009年11月に刊行された、千葉県教育振興財団文化財センター研究紀要第26号(以下「研究紀要26」とする)で、房総半島における曽利式系土器についての調査成果を公表したところである⁽¹⁾。ただし、この成果は2005年度までに集成した事例に基づき記載したものであったが、諸般の事情から刊行が遅れてしまったものである。よって、2006年度以降、多数の論者の興味を引いている、遠隔地の曽利式系土器に関する研究成果を十分に反映できていない嫌いがある。そうしたこともあり、房総半島における曽利式系土器について、近年の見解をふまえながら再論し、今後の見通しを若干述べてみたい。

なお、本論考は、国立歴史民俗博物館共同研究『東アジア先史時代の定住化過程の研究』（2007～2009年度）の一環である。

1 遠隔地で出土する曾利式系土器を巡る問題

遠隔地で出土する曾利式系土器については、近年特に注目が高まっているといえよう。これにはいくつかの要因が考えうるが、1980年代以降バブル景気を経て各地の資料蓄積が大幅に進んだこと、またそれに基づく土器研究の進展があるといえよう。大枠としての土器編年はほぼ固まったといえ、各地域の土器群の様相も1990年代の後半には、1980年代とは比較にならないほど明らかとなり、ある地域で主体を占める土器の様相と客体的な土器の存在が見通せるようになってきた。また、地域間における資料の質的・量的な差異もかなり解消されつつあり、地域間の比較も可能となってきたことが背景にある。

曾利式土器については、釈迦堂遺跡に代表される山梨県域の資料の充実とともに、活発な研究が進められ、時間軸の整備とともに、細別時期ごとの土器のセットなどが明らかにされてきた⁽²⁾。こうした曾利式の本場の研究成果と合わせることで、関東地方以北で出土する曾利式と曾利式類似土器が、本場の土器と比較することが可能となったといえよう。

遠隔地で出土する曾利式土器については、比較的早くから注意されてきたが⁽³⁾、谷口康浩が2002年に発表した「縄文土器型式情報の伝達と変形－関東地方に分布する曾利式土器を例に－」は、遠隔地で出土する曾利式土器に関して、情報の流れという観点から論じた⁽⁴⁾。谷口は、関東地方における曾利式情報の受容がどのようになされたかを概観するため、遺跡ごとの曾利式・加曾利E式・連弧文土器の比率と、曾利式土器に忠実であるかどうかで分類したA～C群を変量として、関東地方における遺跡ごとの曾利式情報を数値化した。その結果、曾利式情報の多寡により等高線を引くことが可能となり、関東地方を「第1～第6地帯」に区分した。北関東から房総半島を含む広い範囲が「第6地帯」とされ、出土するのがオリジナルの曾利式から著しく変容した「紐線文系土器」に限定され、本場の甲府盆地では紐線文系土器が衰退した後の加曾利E3式期にむしろ個体数を増やす、といった重要な指摘を行った。

谷口の発表以降、遠隔地における曾利式についての研究状況は活況を呈した。各地の様相については、橋本勉が汎東日本的に「加曾利EⅢ式」と「曾利式系列」の土器の遺構出土例を集成し、小暮伸之は福島県の曾利式系土器について論じた⁽⁶⁾。

戸田哲也は2006年に「曾利Ⅲ式土器の伝播と変容」を著し、南東北地域における「曾利東北型土器」の概念を提示し、その伝播については型式分布の周縁部を飛び越した遠隔地において、オリジナルの様相を残した土器群が分布するという「飛び火的現象」として認められることを論じた⁽⁷⁾。

新藤健は2007年に、谷口により「第4地帯」と「第5地帯の」境界付近とされた、柳瀬川上・中流域の土器群について、より具体的な様相を提示した⁽⁸⁾。

櫛原功一は2008年、曾利式土器の分布圏について各地の様相を整理して論じた⁽⁹⁾。特に、東北地方への「斜行文類型」の進出と対を成すように曾利式土器分布域の西側にX把手類型の影響が及んでいることを指摘しており興味深い。

2009年には房総半島における曾利式系土器について、前述したとおり筆者が「研究紀要26」の

中でまとめた。

谷口康浩が示した見通しは、遠隔地への曾利式情報の伝達に関して大きな見取り図を描いたと評価でき、谷口の示した見取り図が、地域ごとに検証しうるのかが、その後の課題となった。谷口は、房総半島を「第6地帯」の中で捉えたが、ここでいう「第6地帯」は北関東から房総半島を含む比較的広いエリアで、曾利式の本場である甲府盆地から見たいわゆる「遠隔地」のイメージで捉えられる地域が一括されたものであった。房総半島といったより限定されたエリアで見た場合は、「第6地帯」内でも細かな違いがあることが当然予測されるものであった。

一方、戸田哲也は、谷口が扱った関東地域を越えた曾利式情報の広がりについても注意を促し、その在り方については「飛び火的現象」といった特異な伝播のモデルであることを論じた。時期的な問題も「曾利Ⅲ式古段階・新段階」の概念により、時期的に伝播する土器に違いがあるとする見解を示した。房総半島は「曾利東北型土器」が分布する栃木北東部～福島南部と、曾利式本場との「中間地帯」と見なされた。

谷口、戸田両者の大きな見通しに対し、その後の筆者らの作業は、地域ごとの曾利式系土器のあり方の実態を明らかにすることで、こうした仮説を追認できるものかどうか検証する作業と位置付けられよう。

2 房総半島における曾利式系土器の時間的な位置付け

(1) 時期の見通し

前節で取り上げた谷口康浩の2002年の論考では、曾利式土器情報について、房総半島を含む「第6地帯」においては、「著しく変形して在地化した紐線文系」の土器が「加曾利E3式中に個体数を増や」すという指摘を行った。ここでいう「著しく変形して在地化した紐線文系」の土器は、筆者が述べるところの曾利式系斜行文・重弧文土器であり、遠隔地で出土するこれらの土器の大きな時間的位置付けについて見通しを与えた。

一方、戸田哲也は2006年の論文で、関東地方における曾利式系斜行文・重弧文土器について、横浜市大熊仲町遺跡における出土状況から、「曾利Ⅲ式と認識されてきた籠目文系土器は古期と新期の2段階に分離される」とした。これは「口縁部加飾」を行う「典型的曾利Ⅲ式」を含むJ44号住居出土土器と「口縁部加飾の施されない粗雑な文様構成」の「在地的曾利Ⅲ式」を含むJ145号住居出土土器が時間差をもち、前者は加曾利E式の磨消縄紋成立以前の土器と伴い、後者は「加曾利E3式中～新段階」に伴うとした。ただし、房総半島においてはこうした明瞭な出土状態は見出せず、むしろ出土状況から見ると「典型的曾利Ⅲ式」と「在地的曾利Ⅲ式」の時間的前後関係に整合性が取れず、大熊仲町遺跡で示した新段階に、一部「典型的曾利Ⅲ式」が残存するか、あるいは新段階の「在地的曾利Ⅲ式」が「加曾利E3式中～新段階」より「新しい段階」に伴う可能性にも言及し、房総半島における土器の時間的位置付けを課題として残した。

筆者が2009年に発表した「研究紀要26」では、房総半島における曾利式系土器について集成し、特に曾利式系斜行文・重弧文土器については、破片レベルまでの悉皆調査を実施したものである。この作業により、戸田が課題として残した、「千葉県域に見る遺跡毎の様相の差」について、ある程度答えることとなった。

(2) 「研究紀要26」での方法

「研究紀要26」では、2005年度までに刊行された報告書に基づく集成であるが、房総半島全域の127遺跡から曾利式系土器の出土を確認した。集成に当たっては、いわゆる「斜行文・重弧文土器とその類例」(1類)とそれ以外の曾利式系土器(2類)に分け、1類については、小破片でも同定が容易であるため、破片レベルまで集成した。結果、これらの「斜行文・重弧文土器とその類例」が房総半島において多数存在することが判明した。

出土状況の分析として、遺構出土状況、特に房総半島で多く見られる土器片囲炉における土器の組み合わせ状況に着目し、また、曾利式系土器出土遺構一覧表を作成し大まかではあるが主要な伴出土器を記載することで、遺構出土土器の組み合わせの傾向をみて取ることができた。

この2つの出土状況の分析から見出せたのは、曾利式系斜行文・重弧文土器が、新地平編年⁽¹⁰⁾でいうところの12a・b期、すなわち磨消縄紋成立以降の加曾利E3式前半の土器と強い相関関係があることであった。加曾利E2式以前の土器や、横位連携弧線文土器成立以降の「加曾利EⅢ式」⁽¹¹⁾、すなわち新地平編年で言うところの12c期以降の土器とは、出土状況で見るとほとんど関連を見出せなかったのである。

ただ、集成された曾利式系土器は、文様等が単純化された土器が多く、型式学的観点のみを持って時間的な位置付けを行うことは難しく、細分化が進む加曾利E式の細別に厳密に対応させることは困難であった。ただし、出土状況から大まかな時間的な位置付けはある程度可能であり、特に曾利式系斜行文・重弧文土器の多くのものが加曾利E3式前半期に位置付けうると判断できた。房総半島における曾利式系土器の時間的な位置付けについて、ある程度の見通しを得たので、以下にその概要を記す。

3 房総半島における曾利式系土器の様相

(1) 加曾利E2式以前

新地平編年における10期(加曾利E1式期)から11期(加曾利E2式期)においては、曾利I式・II式に類した土器が断片的に出土する(図1-1~8)。事例としては、曾利I式・II式に見られる、いわゆる長胴甕や条線小甕に見られる特徴を持つ土器がある。「研究紀要26」での集成した際には、これらの土器は、同じ遺構内から加曾利E2式を出土する事例がやや多く認められ、出土状況からもある程度の時間的な裏付けが確認できた。

房総半島南端付近の南房総市(旧富浦町)深名(深名瀬島)遺跡では、例外的にやや多くの個体が出土するが、その他の事例のほとんどは、遺跡内ごく少数の出土である。ただ、房総半島におけるこれら古手の曾利式系土器の類例は、房総半島内では出土地域に偏りがあまりなく、全域にわたって出土していることがわかった。曾利式情報が入ってくるであろう房総半島の南側、西側から遠い、房総半島北東部・神崎町原山遺跡でも良好な事例が出土しており(図1-2・3)、比較的古くから曾利式に関する情報が房総半島全域に広がるルートが存在したことを示すと思われる。

新地平編年11期(加曾利E2式期)以前の時期における、曾利式系斜行文・重弧文土器については、確実な事例として、いくつかの折衷土器がある。

市原市草刈遺跡(B区)205A出土土器(図1-9)は、口辺部に重弧文を持つ土器で、体部に縄

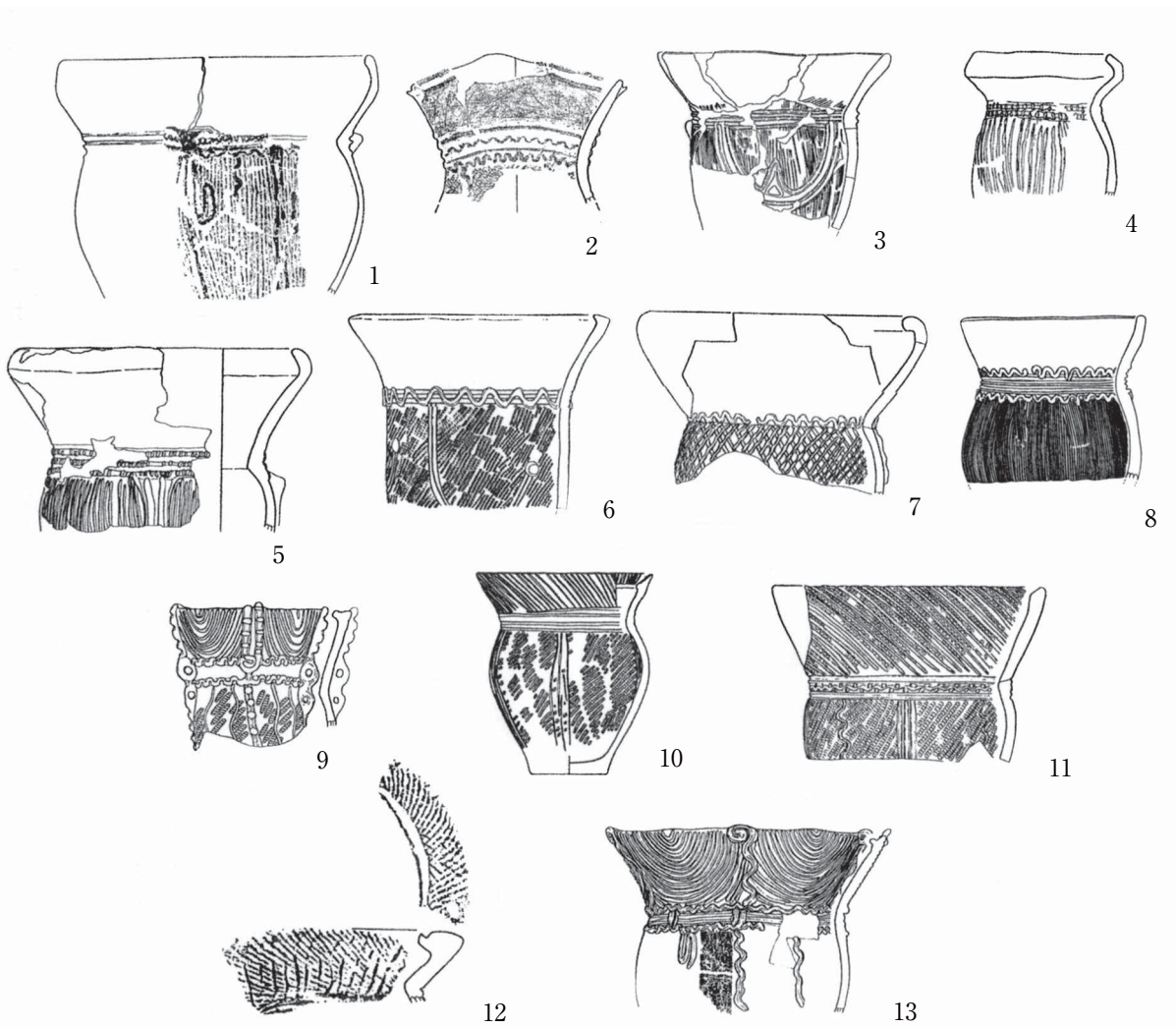


図1 房総半島における加曾利 E2 式以前の曾利式系土器

1: 松戸市根木内, 2・3: 神崎町原山, 4・9: 市原市草刈, 5・12・13: 木更津市伊豆山台,
6・7・10・11: 南房総市(旧富浦町)深名(深名瀬畑), 8: 君津市鹿島台 (*縮尺不同)

紋を施し、緩く蛇行する沈線を垂下させるものである。南房総市(旧富浦町)深名(深名瀬畑)遺跡出土の土器(図1-10・11)はいずれも、口辺部に斜行文を持ち、体部は地紋縄紋上に縦位の沈線を垂下させるものである。これらの土器は、体部文様が加曾利 E2 式と共通する折衷的な土器と考えられ、その編年的位置付けも加曾利 E2 式と並行する時期に位置付けられよう。これらの土器の型式学的特徴として注意すべきは、口縁部の断面形が「受け口」状を呈するものとそうでないものの2者が既に存在していることである。図1-10は口縁部断面が受け口状を呈し、図1-11はそうでないものであるが、両者は土器としては非常に似通った土器であり、少なくともこの2者の型式学的特徴のみをもって積極的に時間差を見出しうものではないであろう。

房総半島の曾利式系斜行文・重弧文土器に見られるこうした断面受け口状の口縁部形態は、もともとは図1-12といったよりオリジナルに近い土器の、肉厚で内側にせり出すような口縁部形態が変容したものであろう。図1-12はいわゆる籠目文土器で、オリジナルの曾利式の様相を色濃く残

す土器であり、おそらく加曾利 E2 式期以前の土器であろうが、こうした典型的な籠目文土器の事例は房総半島では現在のところほとんど見出せない。

断面受け口状の口縁部形態の特徴は、その有無によって房総半島における曾利式系斜行文・重弧文土器の時期判定の鍵的な要素として捉えられてきた経緯があるが、⁽¹²⁾「研究紀要 26」ではそうした見方を否定したところであり、前述の折衷土器の 2 例もこの見解を補強するものである。口縁部断面の形状は一定の時間的経過を反映すると思うものの、房総半島においては時間的傾斜による変化だけでなく、オリジナルな情報が少ないゆえにこうした変化が起こった可能性もあり、口縁部の断面形状が受け口状であるか否かによって、新旧の時期差を設定することができるような時間的に鋭敏な型式学的特徴とは捉えられないと思う。

出土状況からある程度裏付けられる型式学的特徴としては、頸部のくびれ部が平行する沈線や蛇行隆線により幅広く帯状に区画されることが挙げられ、こうした特徴は房総半島における曾利式系斜行文・重弧文土器の中では比較的古い要素と考えられる。その他、図 1-9 のようなやや装飾過多といった点も相対的に古い要素と見なすことができよう。

そうした点から見ると、図 1-13 の木更津市伊豆山台遺跡出土の重弧文土器は、古い様相を持つものと思われるが、その出土状況は住居跡の土器片囲炉として使われ、同じ炉には垂下沈線間の縄紋が磨り消された加曾利 E3 式と判断できる土器が埋設されていた。出土状況だけから見ると加曾利 E3 式に伴うと考えてもおかしくない状況で、加曾利 E2 式期以前に位置付けられる可能性は高いが、その中でも積極的に古く位置付けることはできないと考える。

この時期は、房総半島南端部付近で多量に曾利式系土器が出土する南房総市深名（深名瀬島）遺跡の事例が知られるが例外的で、房総半島全体ではごく少数の曾利式系土器が分布する状況があったようである。ただし、曾利式系土器の出土例は限定されているものの、その分布は房総半島全域に広がっており、後続する時期に曾利式情報が広がるベースは存在したようである。

(2) 加曾利 E3 式前半

房総半島においては、磨消縄紋成立以降で、横位連携弧線文土器成立以前の加曾利 E3 式前半期は、新地平編年における 12a・b 期に相当すると考える。「研究紀要 26」では、房総半島における曾利式系斜行文・重弧文土器の類例は、出土状況から見た場合、その多くがこの時期に相当するものと判断された。そしてこの時期に、曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例が、非在地系土器としては爆発的といえるほど多量に出土すると考えられ、房総半島における曾利式系土器の代名詞のようになる。

型式学的に時期を特定できるものとしては、やはり折衷土器の例があげられる。口縁部に斜行文を持ち体部に加曾利 E3 式の特徴を持つ土器として、図 2-1 の松戸市子和清水貝塚出土土器がある。体部に磨消縄紋を持ち、確実に加曾利 E3 式期に比定しうる事例である。図 2-2 は文様構成上これに類似したもので、図 2-3 も同様の例であろう。また、他の折衷土器の例としては、特異な例ではあるが、佐倉市吉見稲荷山遺跡で出土した加曾利 E3 式の頸部に重弧文が配された土器がある（図 2-4）。図では表現し切れていないが、重弧文より下位では、垂下する沈線間の縄紋が磨り消されており（筆者実見）、加曾利 E3 式前半に位置付けられる土器と判断できる。

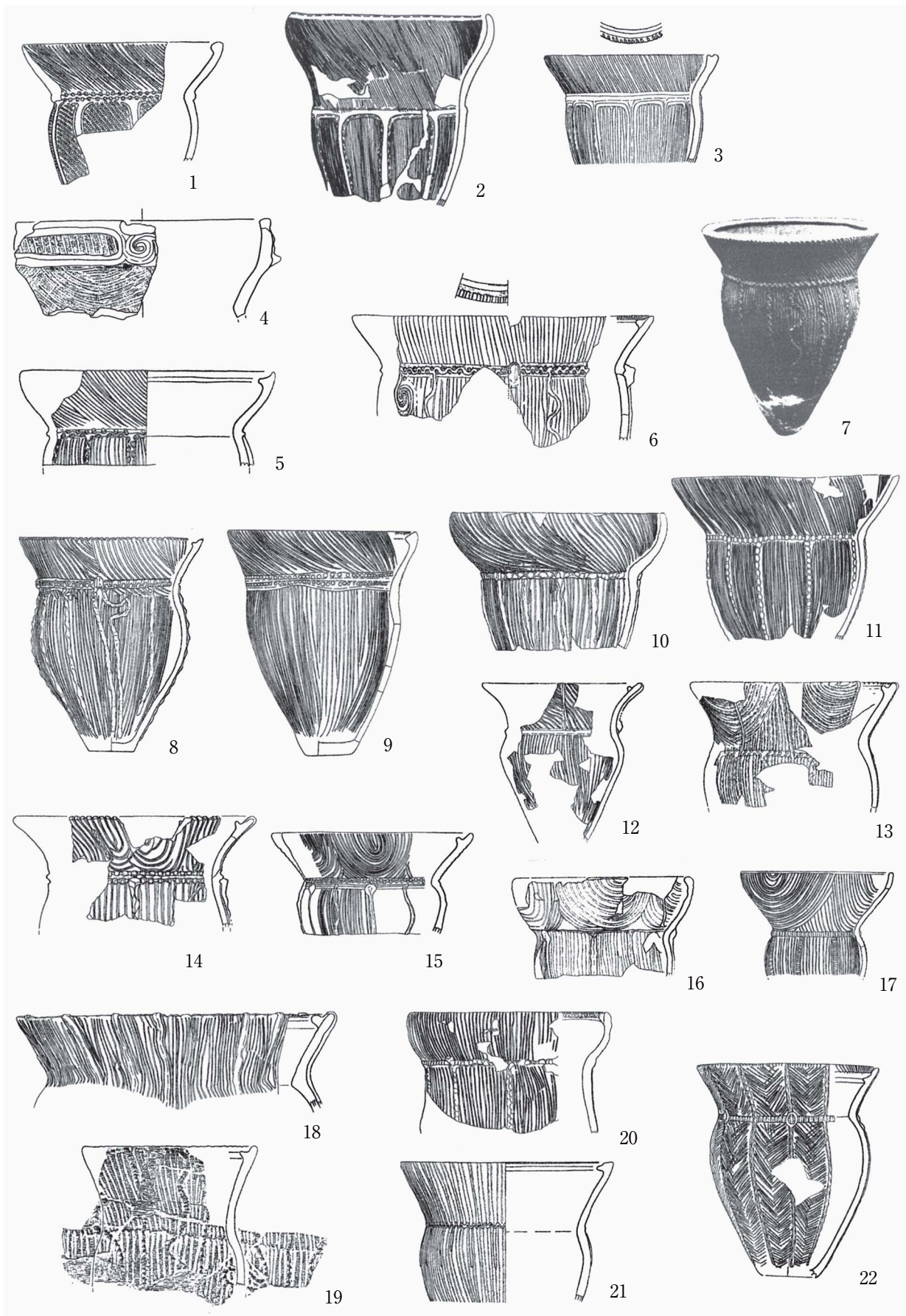


図2 房総半島における加曾利 E3 式前半の曾利式系土器(1)

1・5・6・22: 松戸市子和清水, 2・11: 木更津市台木 A, 3・8・21: 市原市草刈 (B 区), 4: 佐倉市吉見稲荷山, 7: 市川市寒風台, 9・19: 銚子市粟島台, 10: 市原市下鈴野, 12: 四街道市上野, 13: 横芝光町 (旧横芝町) 東長山野, 14: 四街道市和良比, 15: 千葉市有吉北, 16: 市原市野口 (海保野口), 17: 市原市馬立塚ノ台 (土字), 18: 四街道市中ノ尾余, 20: 千葉市大野南 (*縮尺不同)

房総半島における曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例は、文様構成等が単純ではあるものの、ある程度のバリエーションが認められる。大きくは、口辺部に斜行文を持つもの（a種）、口辺部に重弧文を持つもの（b種）、矢羽状沈線を持つもの（c種）、縦位沈線を持つもの（d種）で、その他、口辺部斜行文に縦位の隆線を貼り付けたもの、器形のみ共通し縄紋を施すものなどが若干ある。

a種は図2-5～12である。房総半島内である程度まとまった出土例がある。図2-7は松戸市寒風台遺跡出土で、房総半島では古くから知られた土器であった。a種にはこうした整った土器と、より崩れた印象を与える土器（例えば図2-12）があり、土器の様相にはやや幅がある。こうした土器の間に時間的な前後関係を想定することはたやすいが、確実な出土事例からこれを確定することは困難であった。前述のように受け口状の口縁部断面形状の有無が時期判定の根拠となりえないのであれば、見た目の印象というレベル以上で時間的前後関係を示すような確実な型式学的特徴を抽出することは、単純な土器ゆえに難しく、現状では加曾利E3式前半という時間幅のなかで捕らえておくこととしたい。

受け口状の口縁部断面で体部に蛇行隆線や渦巻文を配した図2-6などについては、加曾利E2式期まで遡る可能性は捨てきれないが、この土器は戸田哲也の論考でも取り上げられたように⁽¹³⁾、住居跡の炉内で加曾利E3式と組み合わせられ土器片囲炉を形成していたものであり、そうした出土状況から積極的に古く位置付けることはためらわれる。

b種は図2-13～17である。こちらも比較的多くの類例があり、これらもa種と同様に整った土器とより崩れた土器が存在する。a種同様、単純化された限られた型式学的特徴の中での変化であり、ある程度時間差が想像できるが、やはり現状では加曾利E3式前半という時間幅の中で捕らえておくのが穏当のようである。

c種は類例が少なく（図2-22）、房総半島内での分布も限られる。後述する加曾利E式と共通するキャリパー形で矢羽状沈線を持つ土器と、分布域を分かちようである。

d種は図2-18～21で、a種・b種に次いで類例がある。a種・b種が頸部を境に文様の施文方向等が異なるのに対し、口辺部から体部にかけて縦位の沈線が連続することが特徴である。こうした特徴からは、a種・b種よりも時間的に後出である印象も受けるが、器形等を含めた全体の様相にはやや幅があり、単純にa種・b種に後続する土器とは考えられない。

加曾利E3式前半には、以上のような曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例が、曾利式系土器として多数出土する。「研究紀要26」で集成した曾利式系土器の大多数が、これらの土器であり、加曾利E3式のキャリパー形土器がある程度出土する遺跡であれば、これらの土器はほぼ間違いなく出土する印象である。

その他の曾利式系土器としては、加曾利E式キャリパー形土器の器形に矢羽状沈線を配した土器が少数認められる（図3-1～3）。これらは、曾利IV式以降のいわゆるつなぎ弧文土器の影響が強い土器と考えられようが、房総半島の南西側でしか出土していない。前述の曾利式系斜行文・重弧文土器の類例で矢羽状沈線を持つc種が房総半島北西部でしか出土していないのと、明瞭に分布域を分かちものである。房総半島内において、曾利式情報の受容に小地域的な差異があることを示す好事例と考える。

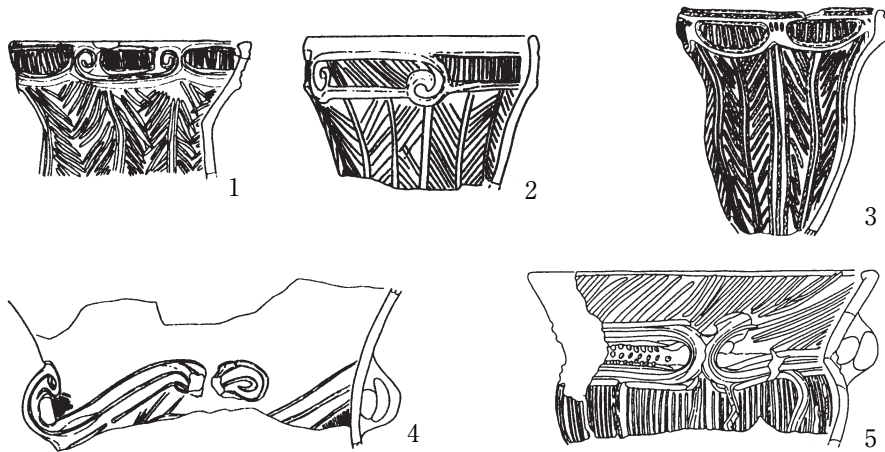


図3 房総半島における加曾利 E3式前半の曾利式系土器(2)

1：南房総市(旧富山町)京田，2・4：南房総市(旧富浦町)深名(深名瀬畑)，
3：木更津市台木 A，5：市原市草刈(H区) (※縮尺不同)

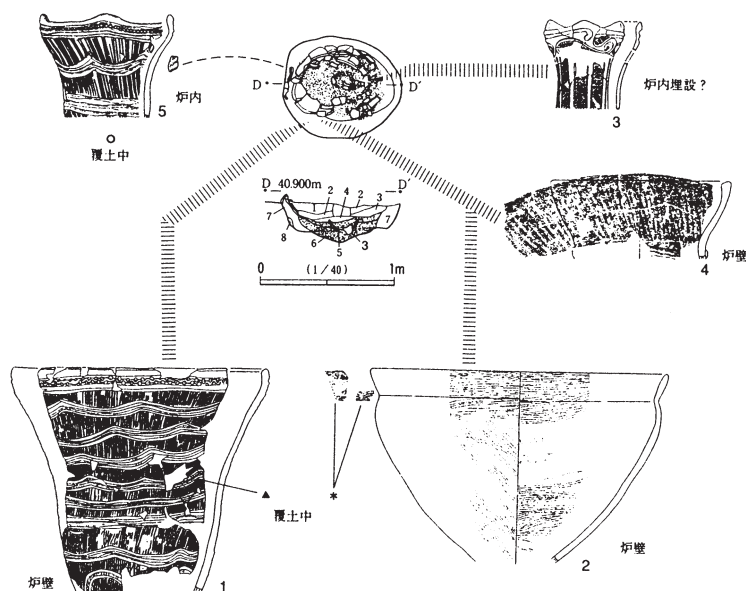
また、きわめて少数であるが、X 把手土器が出土している。図 3-4 は、南房総市深名(深名瀬島)遺跡出土例で、県内で唯一の出土例であったものだが、近年、市原市草刈遺跡(H区)で X 把手土器の影響を受けたと思われる事例が報告された(図 3-5)。この土器は、曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例と X 把手土器の折衷と思われる土器で、特異な事例である。曾利式土器の本場から離れた遠隔地特有の現象と想定され、オリジナルの土器とは関係なく、要素のみが組み合わせられたため、このような土器が生み出されたのではないかと考える。

房総半島における加曾利 E3 式前半の曾利式系土器については、曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例が房総半島の全域に渡って多数出土し、加曾利 E3 式の組成の中に組み込まれた様子が伺える。土器の組成としては、市原市中潤ヶ広遺跡 C037 号住居の土器片囲炉なかうるがひろにおける土器の組み合わせが参考となろう(図 4 上段)。加曾利 E3 式キャリパー形土器に、深鉢として連弧文系土器と曾利式系土器、そこに浅鉢が加わるもので、こうした組み合わせは、当該時期の使用時の土器の一般的な組成をある程度反映しているのではないと思う。

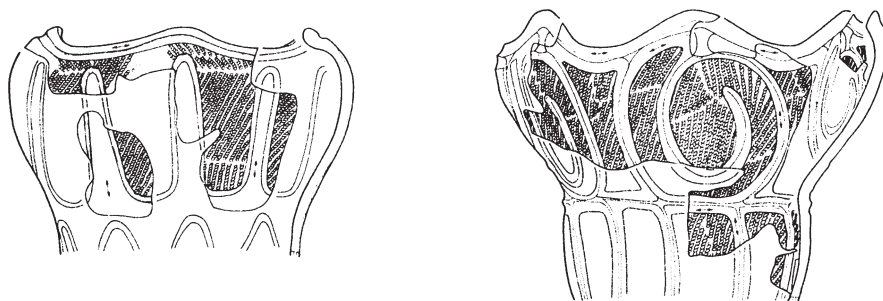
(3) 加曾利 E3 式後半以降

新地平編年 12c 期以降に相当すると考える、加曾利 E3 式後半は、房総半島においては横位連携弧線文土器の成立を指標とし「加曾利 EⅢ 式古段階」として認識される(図 4 下段)⁽¹⁴⁾。房総半島においては、この時期キャリパー形の土器が廃れ、口辺部を幅広く取り頸部でくびれる、伝統的なキャリパー形とは異なる器形の土器が主体となる。この「加曾利 EⅢ 式古段階」の土器と曾利式系土器は、出土状況的にはほとんど関連性を見出せなかった。型式学的に見ても、確実にこの時期まで下ると見なしうるような曾利式系土器は現在のところ見出せない。

房総半島においては、加曾利 E 式の伝統的なキャリパー形土器の衰退とともに、曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例も姿を消すと考えられる。これは、房総半島における連弧文系土器についても同様のようで、加曾利 E3 式後半に土器の様相が大きく変わったことが想定される。非在地系土器という観点から見れば、一つには本場での曾利式土器の衰退の影響が挙げられ、一方ではおそらく東北地方の大木式土器の影響がより強まったことが想定される。



加曾利E3式前半の土器の組み合わせ
(市原市中潤ヶ広遺跡C037住居跡土器片囲炉) (※縮尺不同)



「加曾利EⅢ式古段階」の土器(千葉市小中台遺跡出土) (※縮尺不同)

図4 加曾利E3式前半の土器の組み合わせと、「加曾利EⅢ式古段階」の土器

加納実は、横位連携弧線文土器の成立には、慎重ながら連弧文系土器の関与を想定しているが、⁽¹⁵⁾ 少なくとも房総半島においては、連弧文系土器と曾利系斜行文・重弧文土器とその類例の消失と、横位連携弧線文土器に代表される「加曾利EⅢ式古段階」土器の出現は、一連の出来事のように見える。

曾利系斜行文・重弧文土器とその類例も「加曾利EⅢ式古段階」土器の成立に何らかの役割を果たしたものと思える。それは、曾利系斜行文・重弧文土器とその類例の文様の配置、すなわち、口辺部を広く取り、くびれた頸部の上下で文様を2分するという構成をとることが、「加曾利EⅢ式古段階」土器の器形と文様構成に通じるものがあり、こうした面において一定の影響を与えたのではないかと考える。

おわりに

雑駁ではあるが、房総半島における曾利式系土器の流れを記載することとなった。房総半島における曾利式系土器について情報の受容という点から整理すると、加曾利 E2 式以前の消極的な情報の受容から、加曾利 E3 式前半に一転して曾利系斜行文・重弧文土器とその類例を積極的に受け入れる、ということになる。ただし、加曾利 E3 式前半における曾利系斜行文・重弧文土器とその類例にはバリエーションが認められ、矢羽状沈線などの要素について、房総半島の中での小地域で情報の受容に差異が存在する。他地域からの土器情報の受容については、時期ごとに大きな変化があり、情報の取捨選択がなされる様子が窺え、きわめて複雑であることが解る。

こうした情報の受容の差異が明瞭に見いだせることは、房総半島における曾利式系土器の多くが、おそらく土器そのものが搬入されたのではなく、情報を受容し在地で生産されたケースが多いためと思われる。そうした土器生産のあり方では、個々の土器の型式学的要素の変化は時間的な傾斜を反映するというより、むしろ情報の受容や取捨選択による変化が想定され、ある型式学的要素が時期決定のメルクマールとなるかどうかは、より慎重に判断なされるべきであろう。

「研究紀要 26」においては、房総半島全域の土器について胎土分析を実施し、その成果でクラスター分析をおこなった⁽¹⁶⁾。その結果は、縄紋時代前期の木島式等の非在地系土器が同一遺跡内で出土する在地の土器と同じクラスターを形成せず、むしろ他遺跡で出土する非在地系土器と同じクラスターに入る、といったおそらくは他地域からの搬入を想定させるような結果を示したのに対し、縄紋時代中期の土器は在地系・非在地系土器とも同一遺跡内で出土した土器が同じクラスターを形成するケースが多かった。これは、同じ遺跡内かその近辺で、在地系土器も非在地系土器も同じように生産していた可能性を示唆しており、非常に興味深い結果であった。縄紋時代中期における多様な土器生産のあり方（それは極めて縄紋時代的であると考え）の一端を垣間見せるものであり、情報としての土器のあり方を強く意識させる結果であった。

房総半島における土器様相という点では、加曾利 E3 式前半期における曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例がその存在を強く印象付けたが、これらに伴う在地系土器である加曾利 E3 式前半の様相は、他地域に比べ未だ明瞭とはいいがたい。また連弧文系土器については、房総半島において正面切って論じられる機会が少なく、課題が残っている。集成的研究の必要性を再認識し、改めて今後期したいと考える。

謝辞

大熊佐智子 大村裕 納美保子 加納実 上守秀明 合田恵美子 小林謙一 建石徹 千葉毅
中野修秀 蜂屋孝之 下総考古学研究会 千葉県教育振興財団

註

- (1)——大内千年 2009 「第3章中期の非在地系土器 - 房総半島におけるいわゆる曾利式系土器について -」『研究紀要』26 千葉県教育振興財団文化財センター
- (2)——山形真理子 1996・1997 「曾利式土器の研究 - 内的展開と外的交渉の歴史 - (上) (下)」『東京大学考古学研究室研究紀要』第14・15号 東京大学考古学研究室
- 今福利恵 1999 「中期後半(曾利式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』山梨県
- 櫛原功一 1999 「曾利式土器編年私案」『山梨県考古学論集』IV 山梨県考古学協会
- (3)——能登 健・石坂茂 1980 「重弧文土器の系譜」『信濃』信濃史学会
- 谷井 彪 1987 「塚原遺跡出土の曾利式土器について - 中部高地における文様の系譜 -」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
- (4)——谷口康浩 2002 「縄文土器型式情報の伝達と変形 - 関東地方に分布する曾利式土器を例に -」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- (5)——橋本 勉 2004 「加曾利EⅢ式土器の拡散とフィールドバック(前)」『研究紀要』第19号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (6)——小暮伸之 2004 「福島県出土の曾利系土器について」『福島考古』第45号 福島考古学会
- 小暮伸之 2005 「富岡町前山A遺跡出土の大木8b・9式土器 - キャリパー形深鉢の変遷と異系統土器について -」『福島考古』第46号 福島考古学会
- (7)——戸田哲也 2006 「曾利Ⅲ式土器の伝播と変容」『ムラと地域の考古学』同成社
- (8)——新藤 健 2007 「曾利式土器の外縁地域 - 縄文時代中期後半における柳瀬川上・中流域の土器様相 -」『埼玉考古』第42号 埼玉考古学会
- (9)——櫛原功一 2008 「曾利式土器の分布圏」『山梨県考古学協会誌』第18号 山梨県考古学協会
- (10)——黒尾和久ほか 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平 [発表要旨・資料]』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久ほか 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3 - 勝坂から曾利へ - 発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- (11)——加納 実 1994 「加曾利EⅢ・IV式土器の系統分析 - 編年・配列の前提作業として -」『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- (12)——小川和博 1980 「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」『奈和』第18号 奈和同人会
- (13)——戸田 前掲書
- (14)——加納 前掲書
- (15)——加納 前掲書
- (16)——建石 徹ほか 2009 「第4章 胎土分析」『研究紀要』26 千葉県教育振興財団文化財センター

図出典

図1

- 1 関山純也 1998 「根木内遺跡の調査」『平成8年度松戸市内遺跡発掘調査報告書』松戸市教育委員会
- 2・3 越川敏夫ほか 1995 『神崎カントリークラブ埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』香取郡市文化財センター (原山遺跡)
- 4 小林清隆 1990 『市原市草刈貝塚 - 千葉急行線内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ -』千葉県文化財センター
- 5・12・13 上守秀明 2000 『木更津市内遺跡発掘調査報告書 伊豆山台遺跡』木更津市教育委員会
- 6・7・10・11 越川敏夫ほか 1987 『深名瀬島遺跡調査報告書』富浦町教育委員会 (深名遺跡)
- 8 安井健一ほか 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書5 - 君津市鹿島台遺跡(A区・D区) -』千葉県教育振興財団
- 9 高田博ほか 『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』千葉県文化財センター

図2

- 1・6・22 松戸市教育委員会 1978 『子和清水貝塚 遺物図版編1』
- 2・11 安藤道由 1995 『台木A遺跡』君津郡市文化財センター
- 3・8・21 高田博ほか 『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』千葉県文化財センター
- 4 小倉和重 2006 『千葉県佐倉市吉見稲荷山遺跡(第7次・8次)発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター
- 5 松戸市教育委員会 1985 『子和清水貝塚 遺物図版編2』

-
- 7 ジェラート・グロードほか 1952 『姥山貝塚』日本考古学研究所（寒風台遺跡）
- 9・19 寺村光晴ほか 2000 『粟島台遺跡』銚子市教育委員会
- 10 大村直 1987 『下鈴野遺跡』市原市文化財センター
- 12 大澤孝 1993 「第2篇上野遺跡」『上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター
- 13 道澤明 1990 『東・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会（東長山野遺跡）
- 14 阿部寿彦 2004 「第4章和良比掘込遺跡IV区」『平成15年度四街道市内遺跡発掘調査報告書』（和良比遺跡）
- 15 山田貴久ほか 1998 『千葉東南部ニュータウン19 有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）』千葉県文化財センター
- 16 森本和男ほか 1998 『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書I－市原市海保野口遺跡－』千葉県文化財センター（野口遺跡）
- 17 柿沼修平ほか 1979 『土宇』日本考古学研究所（馬立塚ノ台遺跡）
- 18 大賀健ほか 1986 「中ノ尾余遺跡」『吉岡遺跡群』四街道市吉岡遺跡群調査会
- 20 西口徹 1994 「第15章大野南遺跡」『土気の森工業団地内発掘調査報告書』千葉県文化財センター
- 図3
- 1 阪本宏児 1988 「千葉県安房郡富山町・富浦町・三芳村内の考古遺物」『東邦考古13』東邦考古学研究会（京田遺跡）
- 2・4 越川敏夫ほか 1987 『深名瀬島遺跡調査報告書』富浦町教育委員会（深名遺跡）
- 3 安藤道由 1995 『台木A遺跡』君津郡市文化財センター
- 5 蜂屋孝之ほか 2010 『千原台ニュータウンXXIII－市原市草刈遺跡（H区）－』千葉県教育振興財団
- 図4
- 上段 大内千年ほか 2006 『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書II－市原市中潤ヶ広遺跡（上層）－』千葉県教育振興財団
- 下段 加納実ほか 1989 『小中台（2）遺跡・新掘込遺跡・馬場遺跡』千葉県文化財センター（小中台遺跡）

（千葉県教育庁，国立歴史民俗博物館共同研究員）
（2010年10月6日受付，2011年9月30日審査終了）